



伝統の継承 99 早瀬 宏さん

浜松市幸 2 丁目 18 3

彫刻

神社や寺の欄間などを飾る荘厳な杜寺彫刻、そして祭り屋台を豪華に引き立てる屋台彫刻。もとは一枚の板から彫り出されたとは思えない立体的な造形美が見る人に迫ってきます。

早瀬さんは木彫りひとすじに48年。父親の跡を継ぎ二代目「彫栄堂」

を名乗る彫刻師です。見事な手さばきで彫り込まれていく昇り龍は、寺の本堂入口の両脇に配されるもの。欄間など高い所のものは下から見て映えるように、低い所につくものは正面からと、見る人の視線を考慮して彫るそうで、技術とともに細やかな工夫が凝らされています。

材料はケヤキ、ヒノキなど堅くて丈夫な木で長い年月に味わいのあるいい色になっていきます。まず原寸大の下絵を描き、それを板に写して彫り始めますが、平面的な下絵にはない奥行きや重なり具合は頭の中にある立体的な図案をもとに彫り進んでいきます。「彫っている間にどんどん構想がふくらみ、変化していくんですよ」と早瀬さん。





この彫りの深みこそが腕の見せどころです。

屋台彫刻では市内の祭り屋台の半分は初代の父親と一緒に手がけたそうで、市制80周年記念の浜松市の屋台も正面の彫り物は早瀬さんの作品です。「屋台飾りは欄間より奥行きがあるので細かい細工ができますね」と早瀬さん。図案は歴史上の物語や町に由来する伝説などの依頼もあり、時代考証を含めて詳しく調べて下絵を描き起こします。図案を考え、彫るときにそれをどう表現していくか。早瀬さんは「いろいろな注文がくるから、いまでも仕事面白い」とおっしゃいます。

最近、父親の手がけた屋台とまったく同じ屋台をもう一台作るのと同じ彫り物を依頼され、父親の腕前を再認識したとか。「まだまだ父には及ばない、一生修業ですよ」と笑顔で語る早瀬さん。現在も各地の屋台彫刻を見に出かけたり、図案の参考にするため古い資料を集めたりと、努力を惜しまず精力的に活動されています。

これから二間半もある社寺彫刻に取りかかるそう、また平成15年完成予定の屋台彫刻では中国の三国志をいくつもの彫り物で描くという依頼があり下絵を描き進めています。68歳にして元気いっぱい、朝は8時から夕方6時半まではお仕事に専念されるそうで、早瀬さんの手から生み出される彫り物がこれからも私たちの目を楽しませてくれる期待とともに、次の時代にも長く残るお仕事の文化的な価値を感じました。